

企画セッション I (9/10 10:00~12:00) ワークショップ 内容一覧

題 目	演劇的知を教育活動に取り入れる・パフォーマンスブラーニング
教 室	A 館 A409
担当者名・所属	安永 悟 (久留米大学)、Gehertz 三隅 友子 (徳島大学)
概要 (内容要旨)	<p>近年、教育や研修にインプロ (impro,improv) =即興劇をとり入れる機関や組織が増えている。インプロは、脚本も設定も役も決まらない中で、その場で浮かんだアイデアを参加者が受け入れあい、膨らませながら物語を作り、場面を演じながら作っていく演劇活動である。身体的コミュニケーションを使ったこの手法が、組織や個人の日常を揺さぶり、変化のきっかけを作ることが効果として脚光を浴びている。予測不可能な社会に必要な他者との関係づくり、そしてコミュニケーションの再認識を促す。なぜ教育にこのような演劇的知の導入を勧めるのかに対しては次の五つが挙げられる。</p> <p>① 教育の二つのねらいに適している ② ケア概念が保たれる ③ コミュニケーションを再考できる ④ 心と身体とこえの感覚を取り戻せる ⑤ 個人から全体の「学び」を体感できる これらを教師と学習者が共有することによって、新たな学びの関係を基にした授業が展開できると考える。</p> <p>本ワークショップは、インプロを実際の教室活動 (これまでの講義形式・協同学習形式等以外に) に何らかの形で取り入れることを提案するものである。ワークショップの最後には活動を振り返り、個人と全体で互いの発見をすり合わせ、何よりも「演劇的知の体感」を共有したい。</p>
キーワード	インプロ・身体的コミュニケーション・演劇的知・パフォーマンスブラーニング

題 目	学生の経験を言語化し、学びを深めるライティング指導 —TAE (Thinking At the Edge) をベースにした「経験をことば化する方法」—
教 室	A 館 A410
担当者名・所属	成田 秀夫 (河合塾)、山本 啓一 (北陸大学)、得丸 智子 (開智国際大学)
概要 (内容要旨)	<p>アクティブラーニングが広がり、学生が発信する機会が増えているが、情報を検索して「再発信」するだけに陥ってはいないだろうか。真に発信の「主体」として、学生自身の経験に根ざした思考の発信を促すべきだろう。</p> <p>このような問題意識のもと、私たちの研究グループは、経験から得た知恵 (身体知、暗黙知) をことばで表現する方法 (「経験のことば化」と呼ぶ) を模索してきた。今回は、哲学者ジェンドリンが創始し、得丸 (2008 他) が表現活動としてデザインした TAE (Thinking At the Edge) をベースに、初年次教育で実施可能な「経験をことば化する方法」を紹介する。この特徴を要約すると、次のようになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内省を促し、思考力と表現力を一体のものとして高める ・経験を相対化し意味づける文章表現へと、段階的・系統的にプロセスをデザインする ・他者との共有や、アカデミック・ライティングへの接続に開かれている <p>本ワークショップでは、時間が許す限り、「記憶の断片を小カードに書き取り広げて俯瞰する (データ化) →小カードを類似性によりグループにする (グループ化) →グループ内類似性、グループ間関連性を短く表現する (パターン化) →キーワードを選定し主張の核心を論理的に表現する (構造化)」という一連の手順を体験してもらいたいと考えている。</p>
キーワード	TAE、経験の言語化、アカデミック・ライティング

題 目	2030年の初年次教育から見える今—未来を思うことで今を考える—
教室	A館 A411
担当者名・所属	田中 岳（東京工業大学）、立石 慎治（国立教育政策研究所）
概要 (内容要旨)	<p>「2018年問題」に大きな関心が寄せられています。18歳人口が再び減少に転じ、志願者（入学者）減という現実が切実さを増すためです。そして、その先2030年には100万人を切るが見込まれています。各大学は、いよいよ正念場といったところでしょう。</p> <p>では、2030年度の初年次教育は一体どのようなもののでしょうか。大学間のサバイバル競争という課題はあえて保留し、大学関係者として2030年の初年次教育を考えてみようとするのが、本ワークショップのねらいです。</p> <p>とはいえ、願望や確信からではなく、起こり得る状況（可能性）の吟味がスタート地点になるでしょう。2030年に起こりうる将来像を反省的に捉えることで、現在を再考することに繋げていくという試みです。このプロセスを通じて、現在の初年次教育を動かしている「ドライビング・フォース」があぶり出されていきます。自身の考える（考えてきた）初年次教育へのアプローチを捉え直してみたい方の参画をお待ちしています。</p> <p>[目標] ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語るようになる。[役割] 担当者は会場の相互作用を活性する進行に努めますので、参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。[過程] ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体での共有までを計画しています。</p>
キーワード	2030年、組織化（アプローチ）、シナリオプランニング、人口減少社会

企画セッションⅡ (9/11) ワークショップ一覧

題 目	初年次学生に対するプレゼンテーション指導法
教 室	A 館 A409
担当者名・所属	長山 恵子 (金沢工業大学)
概要 (内容要旨)	<p>初年次教育においても座学中心の授業からの脱却を図り、グループ討議やグループ演習などを実施し、その結果をプレゼンテーションさせる授業が増えています。プレゼンテーションの実施にあたっては説明内容の充実度を評価することは当然ですが、聞き手に伝えるための技法(話し方や態度、提示資料の作成方法)も重要であることを併せて指導する必要があります。本ワークショップでは、プレゼンテーション技法の説明におけるポイントとその技法を活用するための演習の進め方を説明します。さらに演習を通して学生が自身のプレゼンテーションの良い点と改善点を把握するための評価方法とそのフィードバック方法についても検討します。参加者の皆さんにも実際に演習の一部を体験していただきます。</p> <p>以下にワークショップの流れ(予定)を示します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ウォーミングアップ(自己紹介、アイス・ブレイキングなど) 2. プレゼンテーション技法の説明 <ol style="list-style-type: none"> 1) 内容のまとめ方(ストーリー展開を考える) 2) 話し方 3) 提示資料の作成 3. プレゼンテーション演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 演習の進め方 2) 評価の仕方
キーワード	プレゼンテーション技法、動機付け、評価方法

題 目	「学力の三要素」を総括的に育むアクティブ・ラーニング
教室	2A 館 A410
担当者名・所属	川島 啓二 (九州大学)、池田 史子 (山口県立大学)、久保田祐歌 (徳島大学)
概要 (内容要旨)	<p>『高大接続システム改革会議』「最終報告」が提出され、すべての学校段階を通じて、一貫した学習目標としての「学力の三要素」を総括的に育むことが求められていることが、より明確になりました。そのような学習目標の達成のために、アクティブ・ラーニングの方法を効果的に採り入れること、学習プロセスの自己調整と能動的な学習のために振り返りの機能を適時に組み込むことは、これからの授業デザインとして必然的な方向であると言えます。</p> <p>本ワークショップでは、平成26年度にクリティカル・シンキングを育成する授業デザインを、平成27年度にその学習プロセスの評価方法をとりあげました。本年度もその延長線上に、「思考力」を他の学習要素から切り離さずに、「学力の三要素」を総括的に捉えて、さまざまなアクティブ・ラーニングや振り返りの技法によって構成された模擬授業をご体験いただくことで、3年間の総仕上げといたします。</p> <p>大学の初年次教育ご担当の方はもとより、高等学校教員の方のご参加もお待ち申し上げます。</p>
キーワード	「学力の三要素」、アクティブ・ラーニング、ジグソー法、グループ学習

題 目	モデル授業公開検討会 (2) : ノートの取り方
教室	A 館 A411
担当者名・所属	藤田 哲也 (法政大学)、中川 華林 (法政大学大学院)
概要 (内容要旨)	<p>本ワークショップでは、担当者（藤田）が実際に法政大学で行っている初年次教育科目である「基礎ゼミ」について、実際に模擬授業を行い、授業後に参加者と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をする。今回は「ノートの取り方」の授業を行う。「ノートの取り方」は、単なるスタディスキルの一つではなく、学生が「大学では自主的・自律的に学ぶ必要がある」ということを頭で理解しているだけの状態から、実際の行動に反映させるべきこととして認識を改めるための、絶好のテーマである。にもかかわらず、授業担当者からは、学生の「ノートの取り方なんて大学で教えてもらわなくても大丈夫」という主張に気圧されて、表面的・形骸的な指導を行うのみで終わってしまうと聞くことが多い。むしろ「ノートの取り方」は、学生に初年次教育全体の意義に気づいてもらえる、最重要テーマの一つであるといえる。本ワークショップでは「授業内模擬授業（中川が担当予定）」の工夫などを実演しつつ、「ノートの取り方」にいかにして初年次教育の教育目標を反映させられるかについて皆様と討論する予定である。参加者の皆様には、前半は学生の視点で授業を受けていただきたい。後半の冒頭では、指定討論者（中川）から、授業をよりよくするための議論を促す、いくつかの論点を提示するので、まずはそれらの論点について全参加者で意見交換をしたい。その後、参加者からの自由な質疑応答も行う予定である。</p>
キーワード	初年次教育モデル授業、授業検討会、気づき、シラバス